令和6年度 第5回 京丹波町子ども・子育て審議会 議事概要

日時：令和7年1月23日（木） 午後1時30分～午後3時50分
場所：京丹波町役場2階 大会議室
出席委員：14名
欠席委員：4名

1 開会あいさつ

会長：町の広報1月号に、町長、議長、教育長の新年のあいさつが載っていた。教育と子育てのまちづくりというテーマで3人とも文章を書かれていたので、この審議会の重責を改めて感じた。自主放送番組の京丹波ウィークリーの中で、こども議会に小学生が参加している特集があり、子どもたちは京丹波町の未来のまちづくりについてそれぞれの意見を発言していた。議会に参加している大人の皆さんが子ども目線になり、どんな意見が出てくるのか興味を持って聞いておられるのが伝わってきた。子どもたちは、「このおっちゃんら、僕らの話を聞いてくれてイケてるやん」と感じて自己肯定感に包まれたのではないかと思う。

私自身、狭いコミュニティの中で生き方を考えていたと思うが、夏に原教授とオンラインで打ち合わせをしたときに、原教授から「会長さんと副会長さんは京丹波町の子育てに対して何を大切に思って、何を求めているのでしょうか」と問われたときに、即答ができず、自分は京丹波町のことを何も知らないと感じた。このことをきっかけに、人に触れ、つながることや、地域に出かけて食べ物や地産地消や学校教育の現場について知ること、伝統行事に意欲的に参加するようになり、自分のコミュニティや生きるエリアがどんどん広がっていったように思う。エリアを広げてきた自分に対して自己肯定感を感じられるようになった。

子どもは元気で生き生きとしている大人の生き方や、大人たちが「京丹波町が本当に好きだ、京丹波町で生きていることは本当に豊かなことなんだ」と感じて励んでいる姿を見て育っていくんだと思う。この審議会のメンバーも含めて、イケてるおっちゃんやおばちゃんになれるように、その姿を見た子どもたちも京丹波町で生きていくんだと感じてもらえるような、京丹波町愛が伝わるような大人になりたい。

本日は今期のメンバーで行う最後の審議会になる。皆さんのご意見をそれぞれの立場からお聞きしたいので、会議が盛り上がるようにご協力をお願いしたい。

2 報告事項

(1) 第1期京丹波町こども計画策定に係るアンケート調査の進捗について

【事務局による説明】

(2) 第2期京丹波町子ども・子育て支援事業計画の令和5年度進捗状況へのご意見などについて

【事務局による説明】

委員：教育委員会で町内のいろいろな山城を見ていただいている。住んでいる地域にも山城のようなものがあったということで、教育委員会の方に案内してもらったことがある。教育委員会が町内の山城に関する冊子をまとめようとしていることはあまり知られていないのではないか。山城は、町内のいろんなところに二十数か所あると聞いている。自分自身も近くに城があったことを知らなかった。実際に行ってみると、専門家の説明を聞いてはじめて堀の跡であるとか見張り小屋があったらしいということが分かるくらいで、素人では痕跡は分からない。しかしそういった城跡が自分の町のいろんなところにあるということはこれからぜひ町民や子どもたちに周知してもらいたい。

委員：説明は令和5年度の進捗についてだったが、令和6年度は丹波ひかり小の児童が須知城に行ったり、竹野小の子どもたちは地域にある5つの山城に登って説明を受け、リーフレットを作った。学校現場では教育課程に取り入れているので、町の皆さんにも広まってほしいと思う。子どもたちから発信するほうが大人にも注目してもらえるので、工夫しながら進めていきたい。

会長：町内にはまだまだ知らないところやものがあるので、知りたいなという子ども目線で発信するとさらに興味を持ってもらえると思う。教育委員会と連携して進めてもらいたい。

オブザーバー：全町的な山城の冊子の作成も進めている。有償にはなるが、活用していただきたい。

3 審議事項 第3期子ども・子育て支援事業計画案について

(1) 第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画の内容確定について

【事務局による説明】

会長：第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画案について、審議会のアドバイザーでいらっしゃる原先生から計画案に対するご意見をいただきたい。

原教授：非常によくできた、完成度の高いものになったと思う。最初の案と比べると見やすくなっている。ただ、ページ数や文字数が多いので、できるだけコンパクトに、簡単にした概要版を作り、皆さんの手に取ってもらえるようにできるといい。子ども・子育てに関する計画なので、イラストがもう少し入っているとさらによかったと思う。

計画では「つたえ愛」というキーワードを前面に出しておられる。京丹波町のいいところはそこにあって、いい意味でおせっかいな町だということはとても重要で、京都府内でそのような文化を持つ場所がどんどん少なくなっている。そのようなことも具体的な問題として計画の内部に提示されている。夏に会長、副会長とオンラインで打合わせしたときには、京丹波町の事業計画なのか、ほかの自治体のものなのか分からない、京丹波町らしさがないと申し上げた。そこから修正いただき、いいものになった。これで始めていけばいいと思うので、異論はない。

ただ、計画を作ったら、どこかで中間見直しをしなければならない。社会の変化が速く、激しくなっている。そのような情報を盛り込んでグレードアップしていくためには、3～4年のスパンで見直しをする必要がある。事業計画に従って子育て支援がどのように進められていて、どこがうまくいってどこが足りないのか、審議会で検討し、中間見直しをすることが肝だと思っている。まずはキックオフ、始めるための事業計画としては、この計画案でいいのではないかと。

会 長：原先生からのご意見も参考にして、必要に応じて修正をしていきたい。今後の修正があった場合は、会長と副会長に一任していただきたい。原先生がおっしゃったように、5年という長い計画期間なので、時代の変化に合わせて見直しや足りない点について検討する機会があればいいと思う。

(2) 答申書の内容確認について

会 長：令和5年度に町長から諮問いただいたことについて、これまでの審議会の内容も踏まえて答申を作成した。

【答申書読み上げ】副会長

会 長：この答申書と第3期子ども・子育て支援事業計画案を、2月10日に畠中町長に答申したいと思う。修正箇所等があれば、会長副会長に示していただきたい。

4 意見交換 第1期京丹波町こども計画について

(1) 原教授の説明・意見交換（こども計画について）

会 長：本日は原先生にお越しいただいている。前回の審議会では、こども計画と子ども・子育て支援事業計画の抜本的な違いはどこなのか、アンケート調査の実施に際して子どもにどのように説明すればいいのかなど、さまざまなご意見をいただいた。この場はこども計画について理解を深める機会にしたいと考えている。こども計画とはどういったものかや、こども計画では若者への支援についても考えていくことになるので、若者の現状などについても、原先生にご説明いただきたい。

■原教授の説明概要

【こども計画のコンセプトについて】

◎支え合う地域づくりが京丹波町の良さ。みんなで子どもや子育てに関して考えることができる地域（おせっかい）。

◎京丹波町は、10年前に比べて子どもの声が聞こえなくなったと聞いた。子どもの声がなくなると、地域の活気もなくなる。

⇒こども計画は、「子どもの声が聞こえる町にするための計画」というコンセプトで作れたら良い。

◎コロナが明けて大学生が孤立化している。形式的な人間関係の付き合いを避けたり、嫌がる傾向にある。ゼミの飲み会を敬遠したり、トイレの個室に一人でこもるので、個室が不足したりしている。

⇒京丹波町に置き換えて、京丹波町はこれから、トイレを増やす方針を取るのか、トイレにこもる必要がなくなるような施策に転じるのか。こども計画が岐点になる。

◎こども計画では、子どもに関連することを総合的に考えていく骨子になるような計画。

◎京丹波町を子育てがしやすい町にして、活性化していくということが大前提なら、そのためには何をすればいいのかを示す本家本元となる計画。

⇒例えば京丹波町の環境面でどのようなことをしたら、子どもの元気な声が聞こえる町になるか考える。同様にほかにも交通やこども園、小中学校などはどうすればいいのかをそれぞれ考え、まとめて大きな方針として策定する。

◎行政主導型というよりも、京都府が始めようとしているような住民や地域、団体などの力を借りて、子どもの元気な明るい笑い声が帰ってくるまちにするためにはどうすればいいか、みんなで考えることが必要。

【アンケートの実施とフィードバックについて】

◎アンケートへの協力を求めるにはフィードバックが必要。町が意見をどう受け止めて、どう変えたか、どこがうまく行ってどこがそうでなかったのかも含めてはっきり示すこと。

⇒自分が利益を享受できるアンケートでないと答えてくれる人は少ない。アンケートで「町が変わった」と感じられたら、アンケートの回答意欲も増す。

◎アンケートを経年的に続けていくと、データの動向や何が動いたかが分かる。継続して協力してもらうためにも、フィードバックは重要。

◎子どもや子育て世代に合わせて、デジタルや動画も活用するといい。

◎地域振興に参画したい学生は多いが、学生にはツテがない。京丹波町がこの指とまれをしたらいい。

◎校則や制服の見直しをしている学校が増えてきた。子どもたちが意見を言えて、議論をすることで子どもたちの自己肯定感は上がる。

⇒町に意見が言える機会がある。変えるべきところは変えていく姿を見せると、住民の自己肯定感が上がり、京丹波町に住んでよかったと感じてもらえる。

■委員からの意見

委員：私が小学生だったらアンケートの説明資料は少し難しいと感じるし、アンケートも結構量が多いので、やる気は出ないのかなと思う。私自身もお店などでアンケートに答えてくださいと言われても、なにかメリットがなければ答えようと思わない。楽しい動画から始まって、みんなの意見が大人に届くと実現される可能性があるよというメリットを伝えたら、子どもたちはワクワクしながら答えてくれるのではないかな。

委員：説明資料は、先生が子どもに説明し、聞いた子どもが持ち帰って保護者に回答してもらえようようにするために作られたものだったと思う。会議に出ている者からすると、案外分かりやすいと感じた。原先生は、タブレットでアンケートの説明動画を作るといいとおっしゃったが、京丹波町のケーブルテレビをうまく利用できないだろうか。会長に出演してもらうのもいいかもしれないし、子どもたちがこども計画について学んだ成果をテレビで発表して、保護者や若者の皆さんも協力してくださいと呼びかけると、より効果的ではないか。おじいさんやおばあさんも見るので、声をかけてもらう確率も増える。ぜひ子どもたちが話す動画を、ケーブルテレビで流してもらえとうれしい。紙ベースで読むより、動画で視聴するほうが入ってくると思うので、さまざまなことにもっと活用してほしい。

委員：説明資料の字が多すぎると感じたが、例えば4年生なら4年生に分かるように学校でアレンジできるということだったので、それならいいのかもしれない。今は何でも動画で見る時代になっているので、動画で訴えかける意義は大きいと思う。文字ではなくにっこり笑って語りかけることが大事。

アンケートについても、しんどいアンケートを答えたらどう生かされるのか、なんの役に立つのかが分からないと納得して書いてもらえない。すぐに形になって返ってきたと分かるようにフィードバックすることが重要。子どもたちにフィードバックが返ってきて、自分たちの暮らしが楽しくなるから答えるというアンケートなら分かるが、現実としてこのアンケートを毎年実施しますと言えるのか疑問。理想としては、アンケートを行ってすぐに結果と対応方針を報告し、また一年後にできたことやできていないことを報告するといったことを続けていくと、子どもは書いてくれるようになるのではないかな。子どもに寄り添った、継続した息の長い取組にするのが大事だが、現実的にできるだろうか。

委員：町を良くするアンケートを先生に丸投げし、先生が子どもに説明するというところが違うのではないかと思う。先生は仕事として協力してくださるかもしれないが、子どもたちが動画に出て、アンケートをやってみましょうと呼びかけるようなこともできるし、子どもたちにはその力があると思う。学校に協力依頼するのであれば、生徒会などに学校で取り組んでみませんかと伝えたり、自分たちの町や生活のことを自分たちで考えるためのアンケートなんだと子どもたちに考えてもらうのもいいと思う。先生は忙しいと思うし、町の未来に向けた取組としてのアンケートだと説明するのも難しいのではないか。

町の特産物を使った取組などを学校と町がタイアップして進めている。こども議会でも議会の場で学校で取り組んでいることを発表したりもしているので、その一環として取り組んでもいいのではないか。自分たちの立場で取り組む方が、子どもたちが興味を持ち、つられて親も興味を持つようになる。現場の先生にお願いするよりは、そのような形で進められるといいと思う。

委員：説明資料だが、学校の先生に直してもらう前提なのはどうかと思う。先生は京丹波町の方とは限らないので、必ずしも町の実情を十分に知っておられるわけではない。アンケート調査の結果を目に見える形にするという話でいうと、和知小学校が数年前に地域の危ない箇所、気になる箇所を保護者に尋ねたことがあり、意見が2件出てきて、その年度のうちに改善に向けた動きがあった。目に見えることがすぐに起こったので保護者の中で広まり、次の年の調査では意見が十数件に増えた。そこが急に危なくなっただけではないので、これまでは「言ってもどうにもならないから言わない」と考えていた人が、目に見える成果のおかげで言ってくれるようになったと思う。目に見える成果があると、協力してくれる人も増えるはず。

委員：アンケートをお願いされて、じゃあやりますという橋渡しだけではなくて、教員が説明できるようにするということが大事なこと。確かに京丹波町に住んでいない教員もいるが、勤務した学校の子どもたちのふるさととして学校教育にどう携わっていくか、各学校で考えていくのは大事な仕事。ただ、資料が何もないと説明はできない。この説明資料は、教員が子どもに説明するという点では分かりやすいと思う。

本校では、職員会議で対象の4年生以上だけでなく、全職員で資料を共有した。自分たちがどんなアンケートに答えるのか、子どもが理解できるように説明し、アンケートに取り組めるようにしようと話した。時間を取ることになるので、その時間を大事にしたいと考えている。各学校や学年に合わせて、説明資料を基に、補足や分からないところの説明をして、それぞれで取り組まれると思う。

アンケートの第1回目はこの方法で始めて、フィードバックもしてもらえると聞いているので、町のみんなはこんな風に考えていると結果が見えるといい。毎年アンケートをするのであれば、2年目以降はどんな風変わったのかや、自分の思いがどのように届けられるのかということなど、取組について事前から調整してもらえるとありがたい。子どもたちは自分の町について考える力がついてきているし、こども議会を通じて声をあげることも学んでいる。自分たちが声をあげて、取り組んでいくことが来年度以降はできると思う。それに向けて、教員がアンケートに答える意義や、これからの教育にどのように生かされるのかを一緒に考えて進んでいかないといけないと感じる。

地域は子どもをしっかり支える土台で、教員はずっといるわけではなく、入れ替わっていくので風のような存在。教員が在籍する期間でどれだけ子どもに向き合えるのかが大事なので、いい影響になるように土である地域と一緒にはぐくんでいきたいと考えている。子どもたちと一緒に、町が良くなったり将来につながるように、アンケートに取り組みたいと思っている。

委員：アンケートの基準日は令和5年10月31日と書いてある。小学生・中学生の調査基準日も同様か。基準日以降に転校してきた子どもには調査票が配布されないことにはならないか。

事務局：若者の調査については抽出を行う関係で基準日を設けているが、小・中学生については、転校などを反映した最新の数分を配布するので、全員に届くことになる。

委員：原先生のお話や皆さんの意見を聞いて、自分に何ができるか考えていた。自分自身も2年前に、娘の小学校入学を機に移住してきた。以前住んでいたところでは、教育環境を良くするために意見を伝えたこともあったが、なかなか報われず、難しさを感じていた。その中で京丹波町を見つけて移住し、2年間暮らしてきた。子育て世代は、京丹波町らしさや京丹波町の強みに魅力を感じて住みたいと思ってくれるのではないかと感じる。

京丹波町は当事者意識が強い町で、年齢を問わず、子どもの育ちについてどうしていこうかと考えてくださっている方がいるし、教育現場の先生の顔を見てもかかわろうとしてくださっているのが伝わる。先生のやりたいことを授業に反映されているとも感じる。住んでいる区では環境をよくするために草刈りがあったり、一つひとつのことに当事者意識を持っていらっしゃる方が多い。皆さんは当たり前と感じているかもしれないが、全国を見ると関係性が希薄になっていて、当たり前ではない。

京丹波町は声が反映されやすいと感じているので、意見で出たように、アンケートの説明に生徒会が出てもらうことや、こども議会を活用することなどやりようはある。

ケーブルテレビの仕組み自体はすでにあり、いかに活用していくかだと思うので、PRをもっとうまくやってほしい。子どもたちのために何かしたいと思うてくださる方がいらっしゃる町なので、形にしてくださると、原先生のお話で出たことは実現すると思う。

人口減少は仕方ないことなので、いかに京丹波町へ人を呼び込むかが大事。先ほどの意見を実現すれば、京丹波町はおもしろい子育ての取組をしている、子育てしやすい町だと広がっていくと思う。大学生を呼び込むと関係人口が増えるし、大学生のほうが情報発信は上手なのでPRにもつながる。アイデアではいっぱい出たので、いかに具現化するかだと思う。

会 長：アンケートは2月5日からということなので、今回は教育現場にお世話になる。先生方には京丹波町愛を伝えていただき、いいアンケートになるようお願いしたい。アンケート調査結果をフィードバックすることは行政でお約束していただきたい。アンケートに答えたから何か変わった、反映されているという喜びは、子どもだけでなく誰しも感じることなので、目に見える形になるよう考えていきたい。2回目、3回目のアンケートについてはさまざまなアイデアをいただいた。もっと広がり、楽しめるように進めていきたい。

(2) 委員の皆さんから一言（今期の審議会を振り返って）

委 員：子どもたちは、自分の学校や地域への強い意識を持っている。子どもの声が聞こえない地域になるのは本当に寂しいし、消滅するのではないかと危機感を感じる。京丹波町の少子化は危機的な状況だと思うが、子どもたちには力があるので、私たち大人が子どもに近づいていってできることはないかと考えている。

委 員：さまざまな環境の方がいらっしゃるが、お母さんが元気なら、子どものことを目を離さず見てあげてほしい。皆さん立場は違うが、自分のいる場所で子育てしながら頑張ってもらえるとうれしいし、いろいろな形で応援できるといいと思う。

委 員：こども計画は子どもたちの計画なので、子どもたちの意見を聞いてしっかりかかわってもらうことが、いい計画にしていくために必要だと思う。アンケートのフィードバックについては、「この意見はこのようにしていく」、「ここまではできたがここはまだできていない」などと伝えながら考えていけるといい。

委 員：「かかわり愛、かまい愛、つながり愛、つたえ愛」のキャッチフレーズが好きなので、京丹波町の売りとしてアピールしてほしい。さらに、中学生になつて言うことを聞かなくなつても「しゃあないから親の話は聞いておこうか」と思うような「かまわれ愛」もあると思う。

委 員：小さいことでもいいから違いを作り出すことをモットーにしてきた。この審議会は意見を言うと何か少し変わる、変わるかもしれないと思えたので良かった。意見を言うと変わっていく場所なので、楽しみに思つて参加してきた。

- 委員**：子どもの声が聞こえないというのは、あまり子どもを遊ばせられない親の責任もあるかもしれないと感じる。土日はなるべく外で遊ばせたり、ほかの子どもとかかわらせたりして、活気ある町にしたいと思う。
- 委員**：京丹波町に来たら子育てが楽しくなると感じてもらいたい。子どもの同級生が少ないので、増やしていくために、子育て支援と絡めて移住者を増やす取組ができるといい。すべてのことと子育ては関係しているので、自分自身も何かあれば参加したいと思う。
- 委員**：審議会では体験格差についての話題が出たことがあった。習い事や部活動が選べない地域がある。部活動やスポーツの関係で福知山や園部の学校に行かせたいという声を聞いて、その通りだと思った。自分自身も子どもにはスポーツを頑張ってもらいたいけど、京丹波町にはあまりない。まずは体験させてあげることが大事だと思う。
- 委員**：自分の住んでいる区の役員は全員男性。女性もたくさんおられるが、そのような場に出てこれない雰囲気をも自分たち男性が作っているのだと思う。女性や若者を取り込んでいけるような施策や会議にしていくことが大事だと思う。
- 委員**：子どもを主役にして、審議会のメンバーと事務局で町につなげていくと、自分たちの声が町に伝わり、実現するかもと思ってもらえるようになり、楽しくなるかもしれない。子どもと町がつながり、大人も一緒になって、まずは住んでいる人が楽しくなると、外から見てもいい町だなと思ってもらえるのではないかな。
- 委員**：審議会では複数回グループワークがあり、審議の中でも、子どものことを考えたさまざまな議論が行われ、非常に良かったと思う。いい計画ができたと感じている。計画ができれば、今後は実行することが重要になる。
- 委員**：「かかわり愛・かまい愛・つながり愛・つたえ愛」のキャッチフレーズと合わせて、グループワークのように大人たちが学び合うことも大切だし、子どもから学ぶこともある。子どもが大人に支えてもらうだけでなく、子どもたちも町が元気になる活気の部分を支えているということが、京丹波町では実感できる。学び合いや支え合いがさらに広げられるように頑張っていきたい。
- 副会長**：退職後にいろいろな会議や委員会に参加するようになり、その中で京丹波町の良さを見つけられてきたと思う。多くの会議に参加してきたが、この審議会のような会議はこれまでなかった。闊達に意見や自分の思いを出し合える、世代の異なる人たちが学び合える機会は初めてだった。その中で自分自身も、京丹波町の子育てにかかわっていこうと考えるきっかけになった。自分自身も京丹波町でもう少し頑張っていこうと思えた。
- 会長**：皆さんの意見や思いをたくさん話せる機会を持てたことはよかった。何よりも委員の皆さんの支えのおかげで答申と事業計画ができたので、感謝している。京丹波町の子育てが、ますます目に見える形で進化していくことを願っている。

事務局：本日の審議会が今年度の、そして委員の皆さんの任期最後の審議会となる。委員の皆さんにおかれては、第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画の策定に向けて、忌憚のないご意見をいただいたり、問題提起をしていただいたりして、多大なご協力をいただいた。第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画については、今後議会での審議を経て、議決を得る必要がある。2月10日に答申をした後に議会に提案をしたいと考えている。

5 閉会あいさつ（藤田副会長）

副会長：今期の委員の皆さんには大変お世話になった。令和5年の委嘱から2年間、第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画の策定に向けて、本日まで審議を重ねていただいた。審議会がスタートしたのは令和5年の10月で、学校や保護者会関係の委員は交代された方もいたが、2年間で合計8回顔を合わせる事ができた。

最初の審議会で、会長が開口一番「堅苦しく考えず、思いをたくさん出してほしい。何でも言える会にしたい」と呼びかけてくださった。2人で役を受けたときに、何でも言いやすい雰囲気のある審議会にしたいと話していたことを思い出す。一人ひとりの思いを出してもらえるように、グループワークを何回か行った。その中で次第に打ち解けて、思いを伝えやすい雰囲気が作られたと思う。時には厳しい意見や率直な意見も出たが、次の会議には取り入れてもらい、回を追うごとに私たちの思いが吸い上げられ、心のこもった支援事業計画になっていったと感じている。原先生からは忌憚のないお考えを聞かせていただき、自分にとって深い学びや考える機会を得られた。

縁あって私たちはこの場で出会うことができた。当初から皆さんが話されてきたように、必要な人に真に必要な施策を届けることが、8回の審議会を通じた願いだったと思う。そこから「つたえ愛」が生まれた。来年度から第3期の支援事業計画がスタートするが、京丹波町の子育て世帯だけでなく、すべての方に深く届き、浸透し、生かされていくことを願う。今日でこの会は終わるが、私たちそれぞれ置かれている立場で、見守ったり、届けたり、積極的に参加したりしていきたい。いい機会を与えていただいたことに感謝している。